

日本語形容詞の下位分類：分類基準と機能

湯廷池*

要旨

本稿は日本語の形容詞について、その下位分類と下位再分類における分類基準と分類機能を詳細に分析・論述したものである。論述は日本語形容詞の共通特徴から始まり、下位分類（「客観」・「中間」・「主観」形容詞）と下位再分類（「知覚」（「視覚・次元・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・体覚」）・「関係」・「評価」・「感情」（「感覚・情意」）形容詞など）を経た後、日本語形容詞の下位（再）分類と分類機能との相関関係について（i）下位分類と語彙総数・使用頻度との関係、（ii）下位分類と述定・装定用法との関係、（iii）下位分類と音形・語形との関係、（iv）下位分類と派生・転換との関係、（v）下位分類と複合との関係、（vi）下位分類と恒常的属性・一時的事態述語との関係、（vii）下位分類と共感覚との関係、（viii）下位分類と項構造・主題役割との関係、（ix）下位分類と「第1人称話し手の制限」との関係、（x）下位分類と程度副詞との関係など10項目に渡る詳細な論考を進める。また、最後の結びでは日本語形容詞の下位分類に関する分類基準と機能の分析・討論が理論的研究に寄与するばかりではなく、現場における日本語教育にも貢献するところがあることを示唆する。

キーワード：日本語形容詞 下位分類と再分類 述定と装定用法
共感覚 第1人称話し手の制限

*東呉大学日本語学科大学院 客員教授

The Sub-classification of Japanese Adjectives : it's criteria and functions

Ting-chi Tang*

Abstract

The present paper aims to investigate the merits as well as the criteria for classifying and subclassifying Japanese adjectives. Following Section 1, which briefly introduces the goal and contents of the paper, Section 2 and Section 3 discuss, respectively, the common properties of Japanese adjectives in terms of their phonetic shapes, morphological forms, semantic contents and syntactic functions, and the classification of Japanese adjectives into objective adjectives (and further subclassification into sensory and relational adjectives), evaluative adjectives and subjective adjectives (and further subclassification into sensational and emotive adjectives).

Then, from Section 4.1 to Section 4.10, the paper investigates in detail the relationship between the (sub)classifications of Japanese adjectives and their differences in frequency of occurrence, in the dichotomy of restrictive versus predicative use, in the word-formation of derivation, conversion and compounding, in the dichotomy individual-level versus stage-level predicates, in the directionality or bidirectionality of synaesthesia, in argument structures and thematic relations, in the application of “the First-Person Speaker Constraint”, in the selectional restriction of degree adverbs.

Finally, Section 5 concludes the paper by pointing out that the discussion of classifications and subclassifications of Japanese adjectives not only has its significance from a theoretical point of view but also has its value from a pedagogical point of view.

Key Words : Japanese adjectives, classifying and subclassifying, restrictive, versus predicative use, synaesthesia, the First-Person Speaker Constraint

* Visiting Professor of Department of Japanese Language and Culture Soochow University

日本語形容詞の下位分類：分類基準と機能

湯廷池

1. はじめに

日本語の形容詞とは、一体どのような品詞であろうか？どのような音声的・形態的・意味的・統語的特徴をもっているのだろうか？また、これらの特徴と日本語形容詞の下位分類との間には、どんな関係があるのだろうか？そして、その関係は体系的な**一般化** (generalization) ができるものでしょうか？それとも、そういうような一般化を許さない恣意的なものでしょうか？このような一連の問題に答えることが本稿の目的である。

日本語形容詞の下位分類は、どちらかというところ、今まであまり問題にされなかった文法研究の分野である。多くの文法書はただ漠然と形容詞を「属性形容詞」と「感情形容詞」の2種類に下位分類しているが、その分類基準と機能については多くを語らないのが実状である¹。たとえ分類の基準について述べることがあっても、そのほとんどが意味的・概念的な定義に偏るものである²。しかし、品詞の分類や下位分類に当たって、分類の基準として優先されるのは、概念的・抽象的な品詞の意味よりも、客観的・具体的な音声特徴・形態変化や統語機能である。また、分類の基準は明確かつ具体的なものである上に、その分類の結果は必ずなんらかの分類機能を果たす、あるいは、それに益するものでなくてはならない。すなわち、

¹ 先行研究の形容詞に関する分類は、基本的に属性形容詞と感情形容詞の2大分類に依拠している（例えば、時枝（1950）・小山（1966）・西尾（1972）・寺村（1973、1982）・草薙（1977）・川端（1983）・山本（1983）・沖森（1985）・細川（1989）・金水（1990）・東（1992）・郡（1993）・小針（1994）・仁田（1998）など）と思われる。その中、西尾（1972）は「感情形容詞・属性形容詞」という2分法の名称を最初に明確にさせた代表的なものであると言えよう。

² 例外的に、草薙（1977）や寺村（1982）は形容詞の分類に文機能論的な発想を加味しており、荒（1989）や樋口（1995、1996）と山岡（2000）はそれぞれ形容詞が表す事態と時間との関わりの違いに基づいた「状態形容詞」と「質形容詞」の2分法や「描写形容詞」と「叙述形容詞」の2分法などの新しい分類法を提案している。

単に分類のために分類するのではなく、分類の結果として得られた一般化がなんらかの機能や効果を果たさなければならないのである。本稿は、このような視点から、日本語形容詞の下位分類について、その分類の基準と機能を探求する。

2. 日本語形容詞の共通特徴

日本語の形容詞は、音声的にはみな語幹が母音で終り、それに含まれる**モーラ** (mora) の数は最低 1 モーラ (例えば、「よい・いい・こ(濃)い」) で、最高は 6 モーラ (例えば、「あま(甘)っちょろい、あま(甘)ったるい・すがすがしい・にくにく(憎々)しい」) である³。また、形容詞のアクセント・パターンは、2 モーラ語には頭高型の 1 種類しかなく、3 モーラ語と 3 モーラ以上の語には平板型と中高型の 2 種類がある。さらに、終止形や連体形としては、「-イ」を取るものと「-シイ」を取るものに 2 分できる。

次に、日本語の形容詞は、形態的に**基本形** (root form ; A)・**未然終止形／未実現形／非過去形／現在形** (irrealis / non-past / present form ; A-i / 「イ」形)・**已然終止形／実現形／過去形** (realis / past form ; A-katta / 「カッタ」形)・**連体形** (adjectival form ; 未然・已然終止形と同形)・**連用形**⁴ (adverbial form ; A-ku / 「ク」形)・**中止／並立形** (coordinative form ; A-kute / 「クテ」形)・**条件形** (conditional form ; A-i と / A-i なら / A-katta (な)ら / A ければ)・**譲歩形** (concessive form ; A-i ながら / A-ku とも)・**例示形** (illustrative form ; A-katta り) などがあるが、**命令形** (imperative form) や**意志形** (volitional form) はない。また、形容詞は**名詞化接尾辞** (nominal

³ このモーラの数に関する制限は、おもに単純語に限って言われることで、複合形容詞や複合派生形容詞になるとその限りではない (例えば、「口喧(くちやかま)しい・心寂(こころさび)しい・口幅(くちはば)ったい・しち面倒くさい」など 7 モーラから 9 モーラにまで至るものがある)。

⁴ 連体形が名詞の修飾語として使われるのに対し、連用形は名詞以外の修飾語として、あるいは、名詞以外の品詞と結合して使われる (例えば、「高くなる・高くする・高くも/さえある・古くは/から」)。

suffix) として「-さ」や「-み」を取る一方、**形容名詞⁵化接尾辞** (nominal adjective suffix) として「-げ」(気) や「-そう」(相) を、**動詞化接尾辞** (verbal suffix) として「-がる」(例えば、「寂しがる・悲しがる・痛がる・寒がる・強がる)・「-まる」(例えば、「高まる・広まる・弱まる・温まる)・「-める」(例えば、「高める・広める・弱める・温める・悲しめる・苦しめる・痛める)・「-らむ」(例えば、「赤らむ)・「-ばむ」(例えば、「黄ばむ) などを取るが、「-さ」は**生産力** (productivity) が強く、「-がる」「-まる」「-める」は生産力が比較的強いのに対し、「-み」「-らむ」「-ばむ」などは生産力が弱い。

さらに、日本語の形容詞は、意味的に人や事物に関する性質・状態・感情を表したり、人や事物に対する評価を表したりする。人や事物の外部的な性質や状態を表す形容詞は**属性形容詞** (property adjective) と呼ばれ、人の内面的な感覚や情意を表す形容詞は**感情形容詞** (emotive adjective) と呼ばれることが多く、人や事物に対する主観的な評価を表す形容詞は**評価形容詞** (evaluative adjective) と呼ばれることがある。また、形容詞（とくに、属性形容詞）はおもに**1項述語** (one-place predicate) に属するものが多く、この場合、**対象** (theme) の意味役割を担う名詞句を**内項** (internal argument) として主語に取るのに対し、わずかに感情形容詞が**2項述語** (two-place argument) に属して**経験者** (experiencer) と対象や**誘因** (cause) の意味役割を担う名詞句をそれぞれ**外項** (external argument) や内項として話し手主語や対象主語に取る(例えば、「私は／が頭が痛い」「私は／が君の親切が嬉しい) 以外には、関係を表す形容詞が**疑似2項述語** (pseudo-two-place predicate) に属して対象と**起点** (source) や**着点** (goal) を、それぞれ、内項主語と**疑似項⁶補語** (pseudo-argument) に取る(例えば、「私の家は／が駅から遠い」

⁵ 形容名詞は伝統的な国語学では「形容動詞」と呼ばれている。

⁶ ここでいう「疑似項」とは、意味的には述語の**必須項** (obligatory argument) かのうに振る舞うが、格表示に「ガ」格や「ヲ」格を取らない項を指す。また、「疑似2項述語」とは、2項述語かのように見えるが、その中の1つの項は疑似項であることを指す。

「妻の実家は／が駅に近い」「花子は／が君の妻にふさわしい」)のみである。

最後に、日本語の形容詞は、文法的に動詞とともに **用言** (verbal / predicative) として使われ、**連体言** (adjectival) としても使われるので、**述定／叙述用法** (verbal / predicative use) と **装定／修飾用法** (adjectival / restrictive use) の2つの使い方がある。前者は文の述語として使われる場合を指し、用言(的)用法とも呼ばれる。一方、後者は名詞の修飾語として使われる場合を指し、連体(的)用法とも呼ばれる。

以上が日本語形容詞の音声・形態・意味・統語に関する大體の特徴である。以下、次の節で日本語形容詞の下位分類の基準と内容を説明し、さらに次の次の節から、この下位分類の機能について論述する。

3. 日本語形容詞の下位分類と下位再分類

日本語の形容詞は、まず形容詞の表す性質・状態・関係・評価や感情などが、一般的な**社会的通念** (social convention) や**公(おおやけ)性**に基づいて知覚・判断されるのか、それともそれに基づかない、いわゆる**私(わたくし)性**なものに属するのかわによって、前者を**客観形容詞**⁷ (objective adjective)、あるいは**属性形容詞** (property adjective) と、後者を**主観形容詞**⁷ (subjective adjective)、あるいは**感情形容詞** (emotive adjective) と、呼んで2分することができる。また、前者が客観的な人や事物の存在によって多数の人達に外部から知覚・認識され、後者は主観的な第1人称話し手の感覚や情意によって内部で体験されるのに対し、評価を表す形容詞は話し手が客観的に実在する人や事物に対して主観的な評価判断を述べていると

⁷ 客観形容詞と主観形容詞について最初に論じたのは時枝(1950)である。ここではその名称を引き継ぐ形になるが、両者の間に「中間形容詞」なるものを認めると同時に、実際の分類に関しても、形容詞の意味内容だけではなく、項構造・主題関係・述語のタイプ・叙述の類型などの統語的特徴から派生・複合などの形態変化や共感覚などの意味拡張にも注意を払う点で本稿とは分析の仕方や一般化が大いに異なる。

いう意味で、両者の間に仲介し、両者の性質を合わせ持つ**評価形容詞**⁸ (evaluative adjective)、あるいは**中間形容詞**⁹ (intermediate adjective) と呼ぶことができよう。日本語の形容詞はこのように、一応大雑把に「客観」・「中間」・「主観」の3種類¹⁰の形容詞に分類することができる。詳しい下位分類の基準と機能については、文を追って補充・説明していくことにする。

(1)

<1>客観形容詞

人や事物の客観的な性質や状態を表す形容詞、外部に現れた形や色などによって知覚・識別されることが多く、その知覚・識別の基準は公性をもつ社会的通念によるものが多い。先行文献に現れた属性形容詞の多くがこのタイプの形容詞に属する。例えば、「明るい・暗い・赤い・白い・長い・短い・大きい・小さい・臭い・芳ばしい・甘い・辛い・遠い・近い・等しい」など。

<2>中間形容詞

人や事物に対する話し手の主観的な評価を表す形容詞、必ずしも外部に現れた現象に基づくとは限らず、その評価判断には多少の私性は免れない。例えば、「偉い・強い・勇ましい・かわいい・よろしい・すばらしい・憎らしい・貧しい・いまいまいしい・すがすがしい」など。

⁸ 「評価形容詞」やそれに似た名称は、川端(1983)・小針(1984)や仁田(1998)などに見られる。また、「客観形容詞」や「主観形容詞」と平行する意味で、中間形容詞を「直観形容詞」と呼んでもよからう。

⁹ 先行文献の中でも時枝(1950)は「主観客観総合的な表現の語」という名称を使っている。また、第三の範疇として「評価(の)形容詞」あるいは「評価・判断形容詞」を挙げたのには、川端(1983)・小針(1994)・仁田(1998)などがあるが、これらの内容は必ずしも本稿の評価形容詞の内容とは一致しない。

¹⁰ 山岡(2000: 123-125)は、先行文献の中には評価形容詞を属性形容詞と感情形容詞の間に跨る「第三の範疇」、あるいは、「中間的範疇」と呼ぶものがあることに触れ、「語彙に関してこの種の第三範疇を設けることは不必要かつ不適切である」と言っている。このような意見は、山岡(2000)が「情意・感覚表出」「属性・関係叙述」「状態描写」というような文機能論的な基準から形容詞を下位分類した結果、評価形容詞を認めると、この枠からはみ出してしまうためであろう。

〈3〉主観形容詞

第1人称話し手がその身体や心理の内部で体験する感覚や情意を表す形容詞、話し手個人の内部に起る生理的感覚や心理的情意を表すので、完全に私性に基づくものである。先行文献に現れた感情形容詞の多くがこのタイプに属する。例えば、感覚を表す「痛い・苦しい・痒い・だるい」や情意を表す「楽しい・嬉しい・悲しい・懐かしい・うらやましい」など。

次に、この3種類の形容詞をさらに下位分類する。客観(あるいは、属性)形容詞はさらに**知覚形容詞** (sensory adjective) と**関係形容詞**¹¹ (relational adjective) に分けることができ、主観形容詞もさらに**感覚形容詞**¹² (sensational adjective) と**情意形容詞**¹² (emotive adjective) に分けることができるのに対し、評価形容詞に特筆に価するような下位分類はない¹³。知覚形容詞とは、人間の**知覚器官** (sensory organs; すなわち、**五感** (five senses)) によって知覚・識別される属性を表す形容詞を指し、それぞれの知覚器官に基づいて**視覚形容詞** (visional adjective)・**次元形容詞** (dimensional adjective)・**聴覚形容詞** (auditory adjective)・**嗅覚形容詞** (olfactory adjective)・**味覚形容詞** (gustatory adjective)・**触覚形容詞** (tactile adjective) などに分けることができる。これらの知覚形容詞に共通するのは、みな対象を内項とする1項述語に属することであり、文構造の上ではこの対象が主語として**写像** (map onto) される。また、これらの形

¹¹ 「関係形容詞」の名称は山岡(2000: 99)から。

¹² 「感覚形容詞」と「情意形容詞」の名称は山岡(2000: 127)でも使われている。

¹³ 勿論、評価形容詞も、単なる評価判断を表す形容詞(例えば、評価対象や**客体** (Th(eme))のみと共起する「美しい・みにくい・きたない・みすばらしい」など)・能力評価を表す形容詞(例えば、評価対象(Th)とその能力方面や**範囲** (Ra(nge); 「...について」)と共起する「(歌が)巧(うま)い・(字が)まずい・(英語に)強い・(数学に)弱い・(世界地理に)詳しい」など)・態度評価を表す形容詞(例えば、評価対象(Th)とその態度対象(Go(al); 「...に対して」)と共起する形容詞「(生徒に)厳しい・(妻に)優しい・(子供に)甘い」)などの下位分類が考えられるが、この問題は将来の研究課題に残したい。

容詞はおおむね**恒常的属性述語**¹⁴ (individual-level predicate) に属するので、属性叙述文¹⁵ を形成することが多い。知覚形容詞には、この他に「熱い・暑い・暖かい・ぬるい・涼しい・冷たい・寒い」のような体覚形容詞とでも呼ぶべきサブ・タイプがあるが、これらの形容詞は天気や気候を指す場合と身体のある部位の感覚を指す場合の2通りの使い方があり、前者（例えば、「暑い・暖かい・涼しい・(風が) 寒い¹⁶」）の場合は恒常的属性述語にも、**一時的事態述語**¹⁷ (stage-level predicate) にも使われて1項述語に属するのに対し、後者（例えば、「熱い・冷たい・ぬるい・(体が) 寒い¹⁶」）の場合は、主に一時的事態述語として **誘因／原因** (Ca(cause)) や **対象** (Th(eme)) を主語に取る（例えば、「お風呂の水は熱い／冷たい／ぬるい」「この子の頭は熱い／冷たい」）。また、関係形容詞とは、対象を内項主語に、**起点** (So(urce))；例えば、「学校は駅から遠い」・**着点** (Go(al))；例えば、「家は駅に近い」) や **共事／同者** (Co(ncomitant))；例えば、「太郎は次郎と親しい」) を疑似項補(足)語に取る疑似2項述語に属し、恒常的属性として使われるのが原則である。

一方、感情形容詞の下位分類に属する**感覚形容詞** (sensational adjective) は、「私は どころが 痛い／苦しい／痒い／きつい／だるい」のように、第1人称話し手を**経験者** (Ex(periencer))；すなわち、感覚主体) として主題（「ハ」格）か主語（「ガ」格）に取り、第1人称話し手の**身体部位** (body-part；広義の**場所** (Lo(cation)) に含まれる) として対象主格¹⁸（「ガ」格）に取る2項述語に属し、原則

¹⁴ 「恒常的属性述語」は「**個体レベル述語**」ともいう。

¹⁵ 「属性叙述文」は 益岡 (1987: 21) の用語であり、「**主題文**」 (topic(alized) sentence) ・「**有題文**」・「**題述文**」・「**提示文**」とも呼ばれることがある。また、知覚形容詞の中には、「今日の空は青い」「空と海は青い」のように、恒常的属性述語として属性叙述文を形成するほかに、「西の空が黒い」のように、時空の制限のもとに一時的事態述語として事象叙述文を形成することがある。

¹⁶ 「私は(木枯らしで)体が／木枯らしが(体に) 寒い」と言えると主張する母語者がいるので、感覚形容詞の中に入れておくべきかもしれない。

¹⁷ 「一時的事態述語」は「**場面レベル述語**」ともいう。

¹⁸ 形容詞の**対象主格** (theme nominative) は動詞の**対象目的格** (theme accusative) に匹敵するが、対象目的格が**動作性述語** (actional predicate) の目的語として「ヲ」格を取るのに対し、対象主格は**状態性述語** (stative predicate) の目的語として**動作主主格** (agent nominative) と同じように「ガ」格を取る

的に一時的事態述語として使われる。しかし、同じく感情形容詞の下位分類に属する **情意形容詞** (emotive adjective) は、「私は／がなにが 楽しい／嬉しい／悲しい／寂しい／うらやましい／いじらしい」のように、第1人称話し手を経験者として主題（「ハ」格）か主語（「ガ」格）に取り、対象や誘因を対象主格（「ガ」格）に取る2項述語に属し、原則的に一時的事態述語として使われる。両者が唯一違うところは、情意形容詞の内項の担う意味役割が第1人称話し手の情意を誘発する対象か誘因¹⁹であるのに対し、感覚形容詞の内項の担う意味役割は第1人称話し手の感覚が起こる身体部位²⁰であり、しかも **照応形** (anaphor) の「自分」のように、その**先行詞** (antecedent) である、第1人称話し手に **束縛**²¹ (bind/be bound) されなくてはならないという点である。

上述(1)の図示で表した日本語形容詞の下位分類を、(2)の図示でさらに細かく下位再分類する。

(2)

<1> 客観形容詞²²

知覚形容詞と関係形容詞からなり、人や事物の客観的属性を叙述する。

(i) 知覚形容詞

人間の知覚器官によって認識・判断される人や事物に関する性質や状態を表す形容詞。原則的に1項述語に

ので、「対象主格」と呼ばれて「動作主主格」と区別されることがある。しかし、形容詞の対象主格も、動詞の対象目的語も、それぞれの **項構造** (argument structure) においては内項であることに変わりはない。

¹⁹ 山岡(2000: 135-145)は「原因格」という名称を使っているが、「私は故郷が懐かしい」に対応する特殊疑問文が「なぜ／どうして懐かしいの？」ではなく、「何が懐かしいの？」であるので、一応対象として解釈しておく。

²⁰ 身体部位が第1人称話し手の主語のものでなければならないという意味で、感覚形容詞は **再帰的** (reflexive) であり、そのような制限を受けない情意形容詞は **非再帰的** (irreflexive) であると言えよう。前述の如く、身体部位は広い意味での場所の意味役割に含まれるかもしれない。

²¹ 「 α が β を「束縛」する」というのは、 α が β を **C統御** (c-command) し、かつ α と β が **同一指示** (co-indexed) であることを指す。要するに、内項は外項(第1人称経験者)の身体部位でなければならないというわけである。

²² (1)の図示で述べた客観形容詞・中間形容詞や主観形容詞に対する説明の内容はここで繰り返さないことにする。

属し、恒常的属性述語として使われることが多く属性叙述文に現れることが多いが、なかには（例えば、明暗や色彩を表す視覚形容詞）一時的事態述語として使われることもある。知覚形容詞は、さらに視覚・次元・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・体覚などの形容詞に下位再分類できる。

(a) 視覚形容詞

視覚器官によって認識・判断される性質や状態を表す形容詞。例えば、明暗や色彩を表す「明るい・暗い・薄暗い・赤い・白い・黒い・青／蒼い・黄色い・茶色い」など。

(b) 次元形容詞

一見視覚器官によって認識・判断されるかのように見える属性であるが、その実、線・面や体に関わる、より総合的な認識や判断を必要とする属性を表す形容詞。例えば、「長い・短い・大きい・小さい・広い・狭い・高い・低い・太い・細い・厚い・薄い・深い・浅い・幅広い」など。

(c) 聴覚形容詞

聴覚器官によって識別・判断される属性を表す形容詞。その例語の全部が次元形容詞と共通している。例えば、「(声) が大きい・小さい・高い・低い²³」など。

(d) 嗅覚形容詞

嗅覚器官によって識別・判断される属性を表す形容詞。単純語の例語数は非常に少ないが、「-臭い」を後部要素とした複合語の数はかなり多い。例えば、「臭い・芳(香)ばしい²⁴・かび臭い・なま臭い」など。

²³ 関連する形容名詞に「声高(こわだか)な」がある。

²⁴ 「芳(香)ばしい」(こう/かんばしい)は味覚形容詞としても使われる上に、

(e) 味覚形容詞

味覚器官によって識別・判断される属性を表す形容詞。例えば、「甘い・辛(から)い・鹹(しおから)い・苦(にが)い・酸(すっぱ)い・えぐい²⁵」など。

(f) 触覚形容詞

触覚器官によって認識・判断される属性を表す形容詞、その例語数はそう多くない。例えば、「硬い・柔らかい・粘(ねば)い・粘(ねば)りっこい²⁶」など。

(g) 体覚形容詞

天気や気候を指す場合と身体のある部位の感覚を指す場合の2通りの使い方がある形容詞。例えば、「熱い・暑い・暖かい・ぬるい・涼しい・冷たい・寒い」など。

(ii) 関係形容詞

知覚形容詞が単数や複数の人や事物に関する属性を表すのに対し、関係形容詞は必ず複数の人や事物の間における関係を表すので、項の数は当然2つになる。その1つは内項主語になる対象であり、もう1つは起点(「カラ」格)・着点(「ニ」格)や共事/同者(「ト」格)である。また、関係形容詞は常に恒常的属性述語である。例えば、「(から) 遠い・(に) 近い・(に) 等しい・(に) ふさわしい・(と) 親しい」など。

<2> 中間形容詞

誉め言葉 (plus-

image word) に属するので、評価形容詞として使われるべきかもしれない。形容詞語尾の「-シイ」もそのことを物語っているかのように見える。

²⁵ 「美味(おい)しい」や「不味(まず)い」はその当て字が示すように多分に評価の意味を含んでいるので、評価形容詞に帰すべきであろう。

²⁶ 触覚表現には、このほか、**擬態語** (mimesis) と **軽動詞** (light verb) 「する」を組み合わせた「スベスベ/ザラザラ/ネトネトする」などがあるが、文法範疇の上では形容詞に属さない。また、「重い・軽い」はその物を手で持ったり、捉えたり、抱え上げたりなどしなければ判断しにくい、さらに重い物はそういう方法で重さを認識・判断することはできず、果たして知覚形容詞のどの下位分類に帰すべきか、いまだに定かではない。

評価形容詞のみを含むが、項構造の視点からさらなる下位再分類が可能であろう²⁷。

(iii) 評価形容詞

人や事物に対する話し手の主観的評価を表す形容詞。しかし、話し手は原則的に文構造で顕在化しないので、能力や態度を表す「(英語に) 強い・(数学に) 弱い・(生徒に) 厳しい・(子供に) 甘い²⁸」などのように評価対象を主題や主語に、能力の範囲や態度の相手を補語に取る以外は、一般に1項述語に属し、恒常的属性述語として使われるのが原則である。例えば、「偉い・強い・弱い・難しい・易しい・厳しい・美しい・醜い・良い・悪い・貧しい・よろしい」など。

<3> 主観形容詞

第1人称話し手はその身体や心理の内部で体験する感覚や情意を表す形容詞で、感情形容詞とも呼ばれる。形容詞の中では例外的に2項述語²⁹に属し、第1人称話し手の経験者外項を主題か主語に取り、かつ、身体部位(/場所)か対象(/誘因)を表す場所や対象内項を対象主格に取るのが原則で、常に一時的事態述語として感情表出文に使われる。

²⁷ 脚注 13 を参照。

²⁸ 「涼子は／が 歌は／が うまい」「裕次は／が 字は／が まずい」などのように一見2項述語かのように映る例文は、それぞれ、「涼子の歌は／が うまい」「裕次の字は／が まずい」などのように、広義の所有者と所有物からなる属格主語(「NPのN」)の構文から所有者名詞句が **上昇** (raise)・**付加** (adjion to) して独立の主題や主語となった **二重主格構文** (double-nominative construction) として分析されるべきであろう。長谷川 (1999:87-93) と湯・簡 (2006) を参照。

²⁹ 「眠い」などのように例外的に1項述語に属するものもあれば、「心細い・心苦しい・面映(おもは) ゆい・気(け)だるい」などのように、対象内項を複合形容詞の中に **取り入れた/併合した** (incorporated) ものもある。また、感情形容詞は2項述語に属するが、第1人称話し手の経験者主語が顕在化しない(すなわち、文構造の中に現れない)場合、身体の一部や対象・誘因を表す名詞句だけが顕在化して、あたかも1項述語かのように見えることがある。しかし、この場合も、第1人称話し手が **空の代名詞** (null/empty pronoun; すなわち、スモール・プロ (pro)) の形で文中に現れていると見れば、やはり2項述語であると言えよう。

(i) 感覚形容詞

第1人称話し手の経験者 (Ex) 外項を主題 (「ハ」格) か主語 (「ガ」格) に取り、その身体部位を表す場所 (Lo) 内項を対象主語 (「ガ」格) に取る再帰的形容詞。例えば、「痛い・苦しい・痒い・きつい・だるい・冷たい」など。

(ii) 情意形容詞

第1人称話し手の経験者 (Ex) 外項を主題 (「ハ」格) か主語 (「ガ」格) に、その情意反応を引き起こす対象 (Th) や誘因 (Ca) 内項を対象格 (「ガ」格) に取る非再帰的形容詞。例えば、「楽しい・悲しい・嬉しい・辛(つら)い・懐かしい・羨ましい・こわい・恐ろしい・欲しい・愛しい・恋しい・可愛い・いじらしい・憎らしい・恨めしい・悔しい・珍しい・むずかしい・まぶしい・心細い・心苦しい・面映(おもは)ゆい・有難(ありがた)い」など。

以上、日本語の形容詞を客観形容詞・中間形容詞(評価形容詞)・主観形容詞に3分類し、客観形容詞と主観形容詞はそれぞれ知覚形容詞(属性形容詞)と関係形容詞、感覚形容詞と情意形容詞に下位分類し、知覚形容詞はさらに視覚・次元・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・体覚形容詞に下位再分類した。これらの下位(再)分類は、おおむね形容詞が表す概念的な意味内容に基づいたものであるが、その実、(i) **項構造** (argument structure; すなわち、1項述語であるか、それとも、2項述語であるか)・(ii) **主題関係** (thematic relation; すなわち、どの項(内項・外項・疑似項)がどのような意味役割(対象・経験者・場所・誘因・起点・着点・共同者など)を担うのか)・(iii) **述語のタイプ** (predicate type; すなわち、恒常的属性述語であるか、それとも、一時的事態述語であるか)・(iv) 叙述の類型 (predication type; すなわち、属性叙述文であるか、事象判断文であるか、それとも、感情表出文であるか) などの **意味・統語的素性**

(semantic-syntactic feature) をも考慮の中に入れてある。例えば、知覚形容詞は対象を内項に取る 1 項述語で、原則的に恒常的属性述語に属し、属性叙述文を形成するのに対し、関係形容詞は対象を内項に、起点・着点・共同者などを疑似項に取る疑似 2 項述語で³⁰、やはり恒常的属性述語に属し、属性叙述文を形成する。また、評価形容詞は対象を内項に取る 1 項述語が多いが、中には 2 項述語に属するものもあり³¹、恒常的属性述語に属するものが原則であるが、一時的事態述語に属することもある³²。さらに、その叙述の類型も外的世界に存在する対象の属性を客観的に叙述するのではなく、話し手の対象に対する主観的な評価判断であるという点で中間的である。

一方、感情形容詞に属する感覚形容詞と情意形容詞はともに 2 項述語に属し³³、その外項は必ず第 1 人称話し手の経験者でなければならない。両者が異なるところは、前者の内項が外項第 1 人称話し手の身体部位を表す名詞句を取って再帰性を呈するのに対し、後者の内項は外項第 1 人称話し手の情意を引き起こす対象や誘因を表す名詞句を取って再帰性が要求されない³⁴点である。また、経験者話し手の経験者外項は顕在化する（文中に第 1 人称代名詞が現れる）ことも、しない（第 1 人称話し手が空の代名詞の形で現れる）こともある上に、一時的事態述語として解釈されることが多いが、**文脈** (context) や**談話状況** (discourse situation) によっては³⁵、恒常的属性

³⁰ 一項述語の場合は唯一の項である内項が、そして 2 項述語の場合は疑似項ではなく真の項である内項が、文の主語となる。

³¹ 「太郎は 数学に 強い／弱い」(疑似項)・「あの先生は 点数が 厳しい／甘い」(対象主格) などがその例である。2 項述語に属する場合、主題（あるいは、主語）と対象主格の間に、広義の **所有者** (possessor) と **所有物** (possessee) の **メトニミー／換喩** (metonymy) 的な関係が存在することが多い。

³² 四・六節の内容を参照されたい。

³³ 同じく 2 項述語でありながらも、動作性他動詞が原則として動作主外項（係助詞「ハ」や主格「ガ」）と対象内項（目的格「ヲ」）を取るのに対し、状態性感情形容詞は経験者外項と身体部位あるいは情意を引き起こす誘因である対象内項を取るという点で異なる。

³⁴ 身体部位と誘因はともにその意味役割を対象 (Th) と分析することができ、その下に <+body-part> や <+cause> などの意味素性を使って区別してもよからう。同じように、第 1 人称話し手の経験者もひとまず経験者 (Ex) と分析し、その下に第 1 人称を表す <+I> という意味素性を添えてもよい。

³⁵ 例えば、第 1 人称話し手が潜在化し、対象や誘因が顕在化する「故郷は懐か

性述語として解読されることもあり得る。その結果、叙述の類型は感情表出文に属する（例えば、「(私は) 故郷が 懐かしい」「(私は今朝の注射で) 手が 痛い」）ことが多いが、属性叙述文に属する（例えば、「故郷は懐かしい (ものだ)」「注射は痛い (ものだ)」）こともある。

以下、これらの下位分類や下位再分類がどのような分類機能をもつか、という問題を検証しながら、分類の基準をさらに明確にしていく。

4. 日本語形容詞の下位分類と分類機能

上述の日本語形容詞に関する下位分類は、どのような分類機能と連動するのであろうか？以下、日本語形容詞の下位分類とその分類機能との関係について、節を追って説明・検証していく。

4.1 下位分類と語彙総数・使用頻度との関係

日本語形容詞を克明に収集し、これらの形容詞を上記の方法で下位(再)分類しながら、(再)分類の類別に基づいて各類別に属する形容詞の語彙総数や使用頻度を統計したデータは、残念ながらまだ完全にできあがっていない。しかし、筆者と劉懿珍君の共同合作によって収集された日本語の形容詞を、後者が上記の基準に基づいて分類した資料によると、総数 99 個の基礎形容詞のうち、知覚形容詞は 49 個 (49%)・関係形容詞は 2 個 (2%)・評価形容詞は 33 個 (34%)・感情形容詞は 15 個 (15%)と、語数の上で知覚・評価・感情・関係の順になっている。しかし、これは基礎形容詞に限り、しかも異なり語数について言われることで、語数を増やし、述べ語数も勘定に入れていくと、状況はかなり違ったものになってくる。筆者が朝日新聞社発行の『『おくのほそ道』を行く』・佐々木邦著の『佐々木邦全集』(全十四巻)、筒井康隆著の『文学部唯野教授』という時代・ジャンル (genre)・文体／スタイル (style) の異なる 3 つの著作を読みながら、その中に現れた形容詞を抜き書きした資料に基づくと、

しい(ものだ)」。

総じて評価形容詞が異なり語数においても、述べ語数においても圧倒的に多く、感情形容詞・知覚形容詞・関係形容詞と順を追って減少している³⁶。すなわち、語彙総数と使用頻度の視点から見れば、中間形容詞（評価形容詞）の数がもっとも高く、次いで主観形容詞（感情形容詞）、そして最後が客観形容詞（属性形容詞）という順になっている。これは一般の文章や談話において、人や事物に関する客観的な属性描写よりも、人や事物に対する主観的な評価判断や感情表出が多いという事実を反映しているものと思われるが、ある意味においては本稿の下位分類が決して恣意的なものではないということを書きしているとも思われる。

4.2 下位分類と述定・装定用法との関係

日本語のすべての形容詞について、叙述／述定と修飾／装定の 2通りの使い方があることはすでに述べたが、仁田（1998：34）の統計調査によると、総計 424 語の形容詞のうち、属性形容詞は装定用法が 325 例（77%）・述定用法が 99 例（23%）、と装定・述定の比率が 3.3 対 1 であるのに対し、評価形容詞と感情形容詞では装定用法と述定用法がそれぞれ 76 例（43%）と 102 例（57%）、および 27 例（36%）と 49 例（64%）、と装定・述定の間の比率が逆に 1 対 1.6 および 1 対 1.7 になっている。すなわち、属性形容詞では装定用法が述定用法の 3 倍あまりも使われているのに対し、評価形容詞では逆に述定用法が装定用法の 1 倍半あまりから 2 倍近くまで使われているのである。これは属性形容詞が名詞を修飾・限定する本来の機能を保持している³⁷ のに対し、評価と感情形容詞は動詞の本領である述定用法に歩み寄りを見せていることを物語っているものと思われる。また、形容詞の装定用法と述定用法の使用比率に関するこの統計事実は、恒常的属性述語に属する客観的形容詞と一時的事態述語に属する非

³⁶ 関係形容詞の使用頻度がもっとも低いのは、その語彙総数がもっとも少ないことに原因していると思われる。

³⁷ 仁田（1988）の中には関係形容詞に関する統計数字がないが、関係形容詞は知覚形容詞よりも装定用法が少なく、述定用法が多いと思われる。

客観的（すなわち、中間・主観的）形容詞との間における2分法がある程度 **言語学的に有意義な一般化**（linguistically significant generalization）であることを匂わせているものと思われる。

4.3 下位分類と音形・語形との関係

日本語のすべての形容詞語幹が母音で終わり、そのアクセント・パターンは、2モーラ語はすべてが頭高型（例えば、「よ¹い・い¹い・こ¹い・な¹い」）であり、3モーラおよび3モーラ以上の語は中高型（例えば、「あつ¹い（熱い）・しろ¹い・みじか¹い・うれし¹い）か平板型（あつい（厚い）・つめたい・うれしい）である³⁸。

また、これらすべての下位分類に共通する音声的特徴の外に、客観形容詞に属する知覚形容詞には **未然形／非過去形**（irrealis／non-past form）の「-イ」で終わるものが多いのに対し、主観形容詞に属する情意形容詞³⁹には「-イ」よりも「-シイ」で終わるもの（例えば、「楽しい・嬉しい・寂しい・懐かしい・羨ましい・狂おしい・望ましい・好ましい・恐ろしい・欲しい・愛しい・恋しい・いじらしい・可愛らしい・憎らしい・恨めしい・悔しい・恥ずかしい」）が多い。また、客観形容詞の中でも関係形容詞には「等しい・ふさわしい」など「-シイ」を取るものが見られ、中間形容詞の評価形容詞にも「宜(よろ)しい・素晴(すば)らしい・著(いちじる)しい・激(はげ)しい・喜(よろこ)ばしい・慎(つつ)ましい」などのように「-シイ」を取るものが少なくない。ことに形容詞語幹が**反復形**（reduplicated）を取るものは、「すがすが(清々)しい・いまいま(忌々)しい・しらじら(白々)しい・そうぞう(騒々)しい・ふくぶく(福々)しい・こうごう(神々)しい・ばかばか(馬鹿馬鹿)しい・いたいた(痛々)しい・たどた

³⁸ 日本語形容詞のアクセント・パターンは、形容詞が含むモーラの数に関わらず、(i) アクセント核のない平板型と、(ii) アクセント核が **語尾から数えて2番目の**（penultimate）の自立モーラ（すなわち、撥音・促音・引き音・二重母音の後半部などの特殊モーラではないもの）に落ちる起伏型の2種類に分けることができる。

³⁹ 感覚形容詞の中で「-シイ」で終るものは「苦(くる)しい」の1つしかないようである。

どしい・なまなま(生々)しい」などのように後部反復要素に連濁を許す上に、すべて「-シイ」を取り、そのほとんどが評価形容詞に属する⁴⁰。このことは、客観的な公性に基づいて識別・判断される恒常的な属性を表す客観形容詞には「-イ」形が多く用いられ、主観的な私性に基づいて評価される事態や体験される生理・心理状態を表す中間・主観形容詞には「-イ」形とともに「-シイ」形が用いられたり（例えば、評価形容詞）、「-シイ」形容詞が数多く用いられ（例えば、情意形容詞）する⁴¹ことを物語っている。さらに、客観形容詞のモーラ数が一般に短く、中間形容詞と主観形容詞の一部にモーラ数の長い語が見られるのも両者を分かつ特徴の1つであろう。

さらに、「-シイ」を取る評価形容詞の中には、「V(i)がましい」の形式で動詞から派生されたもの（例えば、「恨みがましい・晴れがましい・押し付けがましい・当てつけがましい・騒がましい・差し出がましい⁴²」や「Nがましい」の形式で名詞から派生されたもの（例えば、「人／口／色／俗／余所(よそ)／外様(とざま)／未練／催促がましい」が含まれる⁴³が、これら「-がましい」も「-シイ」を含むことから、「-シイ」形容詞が文語形容詞の終止形「A し」の流れを汲み、概念的に評価の意味と相当密接な関係にあることが伺われる。この他、形容詞化接尾辞の「-らしい」も「-シイ」を含み、名詞語幹（例えば、「男／女(子)／人間／勿体／子細／情けらしい」）・形容詞語幹（例えば、「可愛／汚らしい」）・形容名詞語幹（例えば、「馬鹿／阿呆／厭らしい」）・動(名)詞語幹（例えば、「誇／愛／分別らしい」）・副詞語幹（例えば、「態と／尤も／大層らしい」）などに

⁴⁰ 「にくにく(憎々)しい」や「いまいま(忌々)しい」は評価形容詞としても使えるが、「(僕は)彼の傲慢が実に憎々しい」「(僕は)あいつのやり方が実にいまましい」のように情意形容詞としても使えるようである。

⁴¹ 同じ関係形容詞の中でも、「遠い・近い」のように描写性を表すものは「-イ」形容詞に属し、「等しい・ふさわしい」のように判断性を表すものは「-シイ」形容詞に属するのも、あながち偶然ではあるまいと思われる。

⁴² 「差し出がましい」は動詞「差し出る」から派生され、「騒がましい」は動詞「騒ぐ」から派生されたものと思われるが、「騒ぎ」と「がましい」の間に起こる [g] 音の重複を嫌って動詞語幹の「ぎ」音が省略されたものと思われる。

⁴³ この他に、「Ad がましい」の語例が1つ（「態(わざ)とがましい」）があるが、同じタイプに属する派生形容詞は見出されないようである。

付いて形容詞を派生するが、これらすべての形容詞が評価形容詞として使われていることにも注意されたい。

4.4 下位分類と派生・転換との関係

形容詞が**接頭辞** (prefix) や**接尾辞** (suffix) などの**接辞** (affix) を取って他の品詞を**派生** (derive) する一方、他の品詞もさまざまな接辞を取って形容詞を派生する。また、形容詞がなんらの接辞も取らずして他の品詞に**転換** (convert) することもある。このように**接辞付加** (affixation) などの語形変化の手続きを経ずに他の品詞に変わることは、**ゼロ形態** (zero form) による派生と解されるところから、転換は**ゼロ派生**⁴⁴ (zero derivation) とも呼ばれる。以下、日本語形容詞の下位分類と派生や転換の関係について述べていく。

まず、形容詞語幹は**名詞化接尾辞** (nominal suffix) の「-さ」・「-み」・「-め」を取って名詞を派生する。この中一番生産力が強いのは「-さ」で、ほとんどすべての形容詞と形容名詞語幹に付加することができる。一方、日本語の形容詞の中で「-み」を取って名詞化するのは、ごく少数の形容詞に限られ⁴⁵、そのすべてが大和言葉に属する単純形容詞である。また、どのような形容詞が「-み」を取るかについても予測を許さず、一般化が難しい。このことから、接尾辞「-さ」による名詞化は**レキシコン／辞書** (lexicon) の中で一々リストする必要はなく、一般的な派生規則 (例えば、「A-さ → N」) によって処理することができるが、接尾辞「-み」による名詞化は、レキシコンの中に独立した**語彙項目** (lexical entry) として一々リストしなければならない⁴⁶。さらに、「-み」を名詞化接尾辞に取る形容詞を下位分類の中で検索してみると、「深み・重み・厚み・臭み・甘み・辛み・温かみ・強み・弱み・痛み・苦しみ・痒み・悲しみ・楽

⁴⁴ 「ゼロ派生」は**ゼロ接辞付加** (zero affixation) とも呼ばれる。

⁴⁵ 伊藤・杉岡 (2002: 171) によると、「-み」を取って名詞化する日本語形容詞の総数は30を超えないという。

⁴⁶ 数少ない例外の1つが「いい」である。「よい」が「よさ」という派生名詞をもつのに対し、「いい」は「いさ」を派生することができない。また、「よい」は連用形「よく」をもつが、「いい」は連用形「いく」をもたない。

しみ・有難み」のように、次元・嗅覚・味覚・体覚・評価・感情と各下位分類にいき渡っていることがわかる。最後に、名詞化接尾辞が少なく、「(帽子を) 深め (にかぶる)・厚／薄め (に切る)・高め (に立てる)・長め (に切る)」のように主に次元形容詞に集中している。

結論として、「-さ」「-み」「-め」の3つの名詞化接尾辞は、「-さ」が顕在的な確定可能の属性や分量（例えば、「20メートルの高さ／*み・200キロの重さ／*み」）を表すことが多いのに対し、「-み」は潜在的な確定が難しい属性（例えば、「人間としての深／重み／*さ」）を表すことが多く、「-め」は目分量や手分量で表す意味合いをもつようである⁴⁷。

次に、**形容名詞化接尾辞** (adjective nominal suffix) 「-そう」と「-げ」について観察・分析してみよう。接尾辞「-そう」は、客観形容詞の中でも話し手と聞き手が形容詞が表す属性を同時に確認できる視覚・次元・聴覚形容詞を除く、ほとんどすべての形容詞がこれを取って形容名詞化することができる。例えば、特定の建築物を目の前に置いて、「そのビルディングは高そうだね」とは言えないが、他人から伝え聞いた建築物について、「東京タワーは高そうだね」と言うことはできよう。同じように、現に大声でしゃべっている人の前で、「この人は声が大きそうだね」とは言えないが、マイクを使わずに街頭演説をしている代議士候補者のテレビの画像の前で、「この人は声が大きそうだね」と言うことはできよう。また、元来は視覚や聴覚で使われていた形容詞が、**共感覚**(synaesthesia)によって別な下位分類の形容詞として使われることがある。例えば、視覚・聴覚形容詞の「高い・大きい」が評価形容詞として「このダイヤは値段が高そうだね」「あの人は肝っ玉が大きそうだね」のように使われる場合がそれである。つまり、「-そう」という接尾辞を取って形容名詞化すると、語幹が内的心理状態を表す感情形容詞でも「痛そう・苦

⁴⁷ これら名詞化接尾辞に関するさらに詳しい論考については、湯 (2006c) を参照されたい。

しそう・痒そう・悲しそう・嬉しそう・楽しそう・(もの) 欲しそう」などのように内的心理が外的様相として現れ、外部から内的心理の観察が可能になる形容名詞に変化するのである。

さらに、形容名詞化接尾辞「-げ」を取る形容詞については、「懐かしい／げ・羨ましい／げ・狂おしい／げ・恐ろしい／げ・もの欲しい／げ・憎らしい／げ・恨めしい／げ・悔しい／げ・淋しい／げ・恥ずかしい／げ・喜ばしい／げ・忌々しい／げ・面白い／げ・くすぐったい／げ」のように、主に「-シイ」を取る情意形容詞に属するようである。その証拠に、「弱い」(評価)・「痛い」(感覚)・「憎い」(情意)などは「-げ」を取ることはできないが、「弱々しい／げ・痛々しい／げ・憎々しい／げ」のように反復して「-シイ」の形になると、「-げ」を取ることができる。一方、客観形容詞に属する知覚形容詞や関係形容詞などには「-げ」を取るものは見受けられない。感情形容詞が「-そう」と「-げ」を取って形容名詞化するとき、「-そう」が外部から観察可能な内的感覚や心理状態を表すのに対し、「-げ」は内的感覚や心理状態が彷彿と感じられるような、外部からの観察というよりも、外部からの観測・推測・推量というような意味合いをもつと言えよう⁴⁸。

最後に、**動詞化接尾辞** (verbal suffix) 「-まる」「-める」「-がる」を見てみよう。「-まる」と「-める」は、それぞれ、さらに「-m-a-ru」「-m-e-ru」と分析することによって、「-m-」は動詞化接尾辞、そして「-a」と「-e-」は、それぞれ、**自動詞化接尾辞** (intransitive verbal suffix) と**他動詞化接尾辞** (transitive verbal suffix) として解釈することができる。知覚形容詞の中で「-まる」や「-める」を取ることができるのは、主に次元形容詞に属するもの(例えば、「高い／まる／める・低い／まる／める・細い／まる／める・広い／まる／める・狭い／まる／める⁴⁹」など)が多く、関係形容詞に属するものはな

⁴⁸ これら形容名詞化接尾辞に関するさらに詳しい論考については、湯 (2006d) を参照されたい。

⁴⁹ 「狭(せま)い」が「-まる」や「-める」を取ると、「ま」音と「ま」音や「め」音の重複を避けるために、「狭(せば)まる／める」のような**異化(現象)**

い。一方、中間形容詞に属する評価形容詞の中にはごく少数（例えば、「強い／まる／める・弱い／まる／める」など）が「-まる」と「-める」の両方を取ることができるが、主観形容詞に属する感情形容詞の中には「-める」は取れるが、「-まる」は取れないもの（例えば、「痛い／*まる／める・苦しい／*まる／める・楽しい／*まる／める」⁵⁰ など）がある。

また、形容詞語幹⁵¹の後ろに付いて「…のように感じる／思う」や「…のふりをする／ぶる」の意味を表す動詞化接尾辞「-がる」は、多くの先行文献が指摘するように、ほとんどが感情形容詞を語幹とする（例えば、「痛い／がる・苦しい／がる・痒い／がる・くすぐりたい／がる・冷たい／がる・楽しい／がる・悲しい／がる・嬉しい／がる・辛い／がる・懐かしい／がる・羨ましい／がる・こわい／がる・恐ろしい／がる・欲しい／がる・愛しい／がる・恋しい／がる・可愛い／がる・いじらしい／がる・珍しい／がる・むずかしい／がる・悔しい／がる」など）が、評価形容詞も「強い／がる・偉い／がる」のような少数の例⁵²がある。

以上の事実は、形容詞語幹の接尾辞付加と下位分類の間にある程度の相関性が存在することを物語っていると思われる。**接頭辞** (prefix) についても、「もの-」「うら-」など**緩和** (downtoning) を表す接頭辞⁵³は、情意形容詞（例えば、「もの憂い／恨めしい／恐ろ

(dissimilation) が起る。

⁵⁰ 感情形容詞が他動詞化接尾辞「-める」を取り、自動詞化接尾辞「-まる」を取らないのは、これらの形容詞がすでに「痛む、苦しむ、楽しむ」のように自動詞をもっていることによるものと思われる。

⁵¹ 「通人がる」のように名詞語幹に付くこともある。また、**形容詞化接尾辞** (adjectival suffix) が名詞や形容詞語幹に付いて、「…の傾きがある」の意を表す「-っぼい」（例えば、「男っぼい・女っぼい・大人っぼい・子供っぼい・骨っぼい・太っぼい・細っぼい・厚っぼい・薄っぼい」など）や「-ぼったい」（例えば、「厚ぼったい・薄ぼったい・腫れぼったい」など）もあるが、ここでは詳述しない。

⁵² 形容詞から動詞への派生は、この他にも「赤らむ／らめる・黄ばむ・黒ずむ・長引く・近付く／寄る・遠退く／去かる（最後の3つは複合語として分析されるべきかもしれない）」などがあるが、生産力に乏しく、一々レキシコンにリストしなければならないので、ここでは詳述しない。

⁵³ 「もの」「うら」は「物」「心」（『大辞林』による）とも表記され、語幹であるか、接辞であるか、それとも接辞的な語幹であるかの判定がいまだにはつき

しい／思わしい／悲しい／狂おしい／狂わしい／恋しい／恋ほしい
 ／強（ごわ）しい／淋しい／はかない／はゆしい／むずかしい／珍
 しい／侘しい」「うら悲しい／恋しい／恋ほしい／淋しい／恥ずかし
 い／珍しい」など）や評価形容(名)詞（例えば、「ものがたい／かま
 しい／きたない／ぎたなしい／きらぎらしい／ぐさい／騒がしい／
 すごい／すさまじい／ゆかしい／うららか／けざやか／しずか／ほ
 こりらか」「うらわかい」など⁵⁴）の前に付きやすいが、例外的に評
 価形容詞に属する「すごい・すさまじい」の前に付いて強調に似た
 意味を表すこともある。一方、「まっ-」「ど-」⁵⁵などもつばら**強調**
 (emphasis) を表す接頭辞は、それぞれ、知覚形容詞（例えば、「ま
っ青(さお)／赤(か)／暗／黒／新(さら)／白／直ぐ」など）と評価形
 容(名)詞（例えば、「ど偉い／ぎつい／けち」など）の前に付きやす
 いことから、形容詞語幹の接辞付加と形容詞の下位分類の間には相
 当密接な関係があることが伺われる。

最後に、形容詞の転換について述べる。日本語の形容詞はゼロ派
 生やゼロ接辞付加によって、形容詞から名詞あるいは副詞(的な語)
 に転換するが、このような転換はおもに色彩や次元を表す視覚形容
 詞に限られるようである。例えば、「(墨で) 黒々と(字を書く)・(灯
 りが) 赤々と(着いている)・(頭を) 深々と(下げる)・(声) 高々
 と(歌を歌う)」のように反復した形で現れるものや、「赤の他人」
 「赤と白」「白と黒」のように名詞の前に属格の形式で付いたり、並
 立したりして現れるものがそれである。日本語形容詞の転換は、こ
 のように例語の数が少なく、従って使用頻度も非常に低い。

りしないが、ここではひとまず接頭辞として取り扱うことにする。

⁵⁴ 「ものたりない・ものたらない」の「もの-」も「なんとなく」のような意味
 合いが含まれていると思われるが、その語構造は名詞語幹「もの」と動詞語幹
 「たり(る)・た(る)」の複合に打ち消しの形が組み合わされた複合形容詞と分析
 されるので、他の「もの-」型形容詞とは少し性質が違うようにも思われる（こ
 の観察は劉懿珍君によるものであるが、この他にも、「もの欲しい」は「なんと
なく欲しい」とも、「なにか(しら)欲しい」とも解説することができる。）

⁵⁵ 接頭辞「ど-」は近世以来おもに関西方言で使われているようである。

4.5 下位分類と複合との関係

派生語 (derived word) が語幹 (stem)⁵⁶ と接辞 (affix) からなるのに対して、複合語 (compound word) は語幹と語幹からなる。日本語の複合形容詞 (compound adjective) は、主に並立型・述定型・装定型・補足型の 4 つのタイプに分けることができる。並立型 (coordinative type) とは、形容詞語幹と形容詞語幹が対等に並立して現れる複合形容詞 ($[A_1 \cap A_2]_A$)⁵⁷ のことで、一般に「 A_1 く(て) A_2 い」⁵⁸ と解釈することができ、並立する形容詞語幹は「面白(くて)おかしい・甘(くて)苦い・甘(くて)酸っぱい・細(くて)長い・暑(くて)苦しい⁵⁹」などのように、同じあるいは比較的近い下位分類⁶⁰に属するのが原則である。

次に、述定型 (predicative type) とは、名詞語幹と形容詞語幹からなり、後者 (A) が前者 (N) について叙述する複合形容詞 ($[N \parallel A]_A$)⁶¹ のことで、一般に「Nが A い」と解釈することができ、叙述する形容詞は「幅(が)広い・奥(が)深い・心(が)痛い／細い／重い／

⁵⁶ 語根 (root) や 語基 (base) と言い換えてもよい。

⁵⁷ $[A_1 \cap A_2]_A$ は前後 2 つの形容詞 (A_1 と A_2) が並立 (\cap) して複合形容詞 ($[\quad]_A$) となることを表す。

⁵⁸ 日本語の形容詞は「 A_1 く(て) A_2 い」(例えば、「安くて旨い酒」と「 A_1 い A_2 い」(例えば、「安い旨い酒」)のように連続して現れることができるが、前者が並立型に属して装定(連体)と述定(叙述)用法の両方に使われる(例えば、「安く(て)旨い酒」と「この酒は安く(て)旨い」)のに対し、後者は装定(連体)用法にしか使えない(例えば、「安い旨い酒」と「*この酒は安い旨い」)。また、「 A_1 い A_2 い」が装定型に属すると分析する根拠は、前者が「 A_1 くて A_2 い」のように接続助詞「て」の挿入を許すのみならず、「 A_1 くかつ A_2 い」のように接続詞「かつ」の挿入を許すのに対し、後者は「て」や「かつ」の挿入(「* A_1 いて／かつ A_2 い」)を許さないなどの事実に見られる。また、並立型が「安く(て)旨くも／さえある」のように副助詞「も・さえ」に前接するのに対し、後者は「*安い／旨いも／さえある」のように許されないことから前者が連用用法をもつのに対し、後者はそれをもたないことも伺われる。両者の樹形図 (tree diagram) をラベル付き括弧 (labeled bracket) で示めせば大方次のようになるう：

(i) $[_{AP} [_{A} A_1 \text{く}] \text{て} [_{A} A_2 \text{く} / \text{い}]]$ (ii) $[_{AP} [_{A_1 \text{い}} [_{A} A_2 \text{い}]]]$ 。

⁵⁹ 「暑いので苦しい」と解釈すれば、装定型でもある。

⁶⁰ つまり、「甘い」と「酸っぱい」はともに味覚形容詞に属し、「細い」と「長い」はともに次元形容詞に属することを指す。一方、「暑い」は体覚形容詞に属し、「苦しい」は感覚形容詞に属するので完全に同じタイプに属してはいないが、体覚と感覚は近いタイプであると言えよう。

⁶¹ $[N \parallel A]_A$ は、後部要素の形容詞 (A) が前部要素の名詞 (N) について叙述 (\parallel) して複合形容詞 ($[\quad]_A$) となることを表す。

軽(かる)しい／苦しい／悲しい／可笑しい／幼(おきな)しい／惜しい／淋(さび／さみ)しい／忙(ぜわ)しい／弱い／強い／憎い／安い／好い・手(が)厚い／荒い／厳しい・気(が)恥ずかしい／難しい・気((け)が)だるい・気味(が)好い／悪い・心地(が)好い・口(が)煩い／重い／堅い／がましい／やかましい／軽い／汚い／淋しい／幅ったい・胸((むな)が)苦しい・面((おも)が)映ゆい」などのように、次元・評価・感情などの下位分類に属することが多いが、「縁(が)遠い」などのように関係形容詞に属するものもある。

また、**装定型** (modifying type) とは、名詞・動詞・形容詞 (> 副詞)・擬態語語幹と形容詞語幹からなり、前者 (N・V・A(d)・Mi⁶²) が後者 (A) を修飾する複合形容詞 ([N・V・A(d)・Mi/A]_A)⁶³ のことで、一般に「Nのように・V-(r)uのように・V-(r)uのが・Aいので・Aみをおびて・Adっすら(と)・MiMi⁶⁴(と)Aい」と解読することができ、修飾される形容詞は「塩(のように)辛い・蒸し(=蒸すように)暑い・見(=見るのが)苦しい・聞き(=聞くのが)辛い⁶⁵・食べ(=食べるのが)辛い・甘(あまみをおびて)酸っぱい⁶⁶・狭(いので)苦しい・暑(いので)苦しい・重(いので)苦しい・薄(うすらっ(と))寒い・ほの(かに)暗い・ひよろ(ひよろと)長い・むず(むずと)痒い・ちゃんちゃらおかしい」などのように、聴覚・味覚・体覚・感覚を表す形容詞⁶⁷が多い。

最後に、**補足型** (complementing type) とは、名詞語幹と形容詞語幹からなり、前者 (N) が目的語や原因を表す補(足)語として後者

⁶² 「Mi」の記号は **擬態語** (Mi(mesis)) を表す。

⁶³ 「[V・A(d)/A]_A」は、前部要素の動詞 (V) や形容詞・副詞 (A(d)/A) が後部要素の形容詞 (A) を修飾 (/) して複合形容詞となる ([]_A) ことを表す。

⁶⁴ 「MiMi」は擬態語の反復を表す。

⁶⁵ 「つらい」「にくい」「がたい」「やすい」が複合形容詞を形成する **生産力** (productivity) は相当に強いので、下位述語 (前部要素) と上位述語 (後部要素) とからなる **複合述語** (complex predicate) と分析すべきかもしれない。

⁶⁶ 「甘く(て)酸っぱい」と解読すれば、[A1∩A2]_A のような並立型の複合形容詞になる。

⁶⁷ 少数ながら「身(み)近(ちか)い/な・縁遠い」のような関係形容(名)詞の語例も見られる。

(A)を補足する複合形容詞([N | A]_A)⁶⁸のことで、[Nが/に | Aい]と解読されることができ、一般に「人(が)恋しい・人里(が)恋しい・人(が)懐かしい・昔(が)懐かしい・人(に)なつっこい」のように感情や評価を表す形容詞が多い。

以上の複合語は、形容詞語幹を**主(要)部**(head/center)として**内心構造**(endocentric construction)をなす複合形容詞であるが、この他にも名詞(例えば、「赤毛・黒髪(がみ)・白髪(が)・細腰・太腿・重石(し)・軽石・高拍子・低腰・強気・弱気」など)や動詞(例えば、「高鳴る…」⁶⁹など)を主要部とした複合名詞や複合動詞があり、形容詞語幹の原形を後部要素の主要部とした複合名詞や複合形容名詞(例えば、「面長(の人)・気重(な話)・気軽(に口をきく)・気長(に待つ)・気短(の人)・口重/軽(な人)・足早(に立ち去る)・足軽(く走る)・足長(蜘蛛)・手長(猿)・手短(に話す)・身近(な人)・間近(に迫る)」もある。これら複合名詞・複合形容名詞・複合動詞に共通するのは、前部要素として起る形容詞語幹は次元形容詞や評価形容詞に属するものが多く、しかも2モーラの形容詞が多いということである。このため、モーラの数が多い感情形容詞や評価形容詞の中でもモーラ数の長いものは、これら複合語の中には起りにくい。この点、形容詞はモーラ数が多くても複合形容詞の後部要素として起ることができるのに比べて、非常に対照的である。

4.6 下位分類と恒常的属性・一時的事態述語との関係

客観形容詞が客観対象(すなわち、「もの」「ひとごと」)の恒常的属性を表すことが多いのに対し、中間形容詞や主観形容詞は主観評価や感情(すなわち、「あわれ」⁷⁰「わがこと」)の一時的事態を表すことが多い。従って、客観形容詞が已然形(A-katta)を取って一時的

⁶⁸ 「[N | A]_A」は、前部要素の名詞(N)が目的語や補語として後部要素の述語形容詞(A)を補足(|)して複合形容詞([]_A)となることを表す。

⁶⁹ 形容詞(>副詞)を前部要素に取る複合動詞の語例の数は非常に少ない。

⁷⁰ 「もの」と「あわれ」の間に2元調和や一致を求める日本古来の文学観や生活観念は、本居宣長の『源氏物語』についての研究などを通して早くから指摘されていた。

な状態を表すのは難しいのに対し、主観形容詞が已然形を取って一時的な事態を表すのは問題がない。

- (3) a. 墨は黒い。(客観・恒常的属性；未然形)
 b. ^{??}墨は黒かった。(客観・恒常的属性；已然形)
- (4) a. 家は学校から遠い。(客観・恒常的属性；未然形)
 b. 家は(^{??}そのときちょっと)学校から遠かった⁷¹。
 (客観・恒常的属性；已然形)
- (5) a. 私は君の失敗が悲しい。(主観・一時的事態；未然形)
 b. 私は(そのときちょっと)君の失敗が悲しかった。
 (主観・一時的事態／已然形)

しかし、時空の制限を受ければ、客観形容詞も一時的状態を表すことがあり、総称的な文脈であれば、主観形容詞も恒常的属性を表すことがある。

- (6) a. 西の空が黒い。(客観・一時的事態；未然形)
 b. 西の空が黒かった。(客観・一時的事態；已然形)
- (7) a. 今日の空は青い。(客観・一時的事態；未然形)
 b. 昨日の空は青かった。(客観・一時的事態；已然形)
- (8) a. 家族の死は(常に)悲しい(ものだ)。
 (主観・恒常的属性；未然形)
 b. 家族の死は悲しかった(^{??}ものだ)。
 (主観・恒常的属性；已然形)

恒常的属性と一時的事態の区別は叙述の種類とも関係する。すなわち、恒常的属性を表す客観・属性形容詞は属性叙述文として有題文に表れることが多いのに対し、一時的事態を表す主観・感情形容詞は感情表出文として有題文にも無題文にも表れ得る。また、客観・属性形容詞が全体と部分や所有者と所有物のような**換喩**⁷²

⁷¹「子供の頃住んでいた家は学校から遠かった」のように、主語名詞句が已然形を含む**連体／関係節**(adjectival / relative clause)で限定されていれば、許容性がずっと高くなる。

⁷²**隠喩**(metaphor)の関係にある2つの名詞句が「類似性」や「近似性」に基づくのに対し、換喩の関係にある2つの名詞句は「近接性」に基づくという点に両者の相違が見られる。

(metonymy/meronymy) の関係にある 2 つの名詞句を二重主格に取る場合、一般にそれぞれ「ハ」格と「ガ」格を取って、**主題**⁷³ (topic/theme) と **中立叙述**⁷⁴ (neutral description) の意味を表すのに対し、ともに「ガ」格を取る場合は、それぞれ、**総記／排他(特立)**⁷⁵ (exhaustive listing) と中立叙述の意味を表す。すなわち、(9a)が「この部屋」という対象について、「天井が高い」という属性を述べるのに対し、(9b)は「この部屋」という対象を取り出し、その「天井が高い」という事態を述べているのである。

- (9) a. この部屋は 天井が 高い。(主題と中立叙述；有題・題述文)
 b. この部屋が 天井が 高い。

(総記・排他と中立叙述；無題・存現文)

一方、主観・感情形容詞が経験者主体と身体部位や経験者主体と誘因の関係にある 2 つの名詞句を二重主格に取る場合、一般に「ハ」格と「ガ」格を取って主題と中立叙述を表すのに対し、ともに「ガ」格を取る場合は排他(特立)と中立叙述を表す。

- (10) a. 私は 頭が 痛い。(主題と中立叙述；未然形)
 b. 私が 頭が 痛い。(排他と中立叙述；未然形)
 (11) a. 私は 故郷が 懐かしい。(主題と中立叙述；未然形)
 b. 私が 故郷が 懐かしい。(排他と中立叙述；未然形)

この場合も、時空の制限を受ければ、已然形を使うことが許され、総称的な文脈であれば、恒常的属性を表すことができる。

- (12) a. 私は 昨日 頭が痛かった。(主観・一時的事態；已然形)
 b. 私は 一頃 故郷が懐かしかった。

(主観・一時的事態；已然形)

- (13) a. 人生は苦しい／辛い ものだ。(主観・恒常的属性；未然形)
 b. 故郷は懐かしい ものだ。(主観・恒常的属性；未然形)

⁷³ 主題はおおむね「～について言えば」のような意味合いを含む。

⁷⁴ 中立叙述は事態の存在や現象の発生を表すという意味で **存在文** (existential sentence)・**存現文** (pre-sentative sentence) や **現象文**とも呼ばれる。

⁷⁵ 総記／排他(特立)はおおむね「この～そしてこの～だけが」の意味合いを含む。

4.7 下位分類と共感覚との関係

ある特定の下位分類に属する形容詞が、別の下位分類の形容詞として用いられるとき、元来の形容詞は**共感覚** (synaesthesia) に基づいて**比喩的** (metaphorcially) に転用されたという。例えば、「黄色い」はもともと色彩を表す視覚形容詞であるが、「黄色い声」では聴覚形容詞として用いられているのがその例である。共感覚とは、このように1つの知覚刺激（例えば、色彩）が、それに対応する知覚（例えば、視覚）だけでなく、別の知覚（例えば、音声としての聴覚）としても同時に生ずるような現象を指す⁷⁶。Ullman (1962 : 227) や Williams (1976 : 463) などの研究によると、共感覚に基づく形容詞の転用は、常にあまり分化されていない低次の感覚から、より分化された高次の感覚に移行するとして、その転用の方向を次のように明確に定式化している⁷⁷。

(14)



辻 (2002 : 53) は、このような定式化が英語とそれに対応する日本語にも見られるとして、次のような例を挙げている。

- (15) a. 触覚 > 味覚 : sharp tastes ; 鋭い味
 b. 触覚 > 視覚 : dull colors ; にぶい色
 c. 触覚 > 聴覚 : soft sounds ; やわらかな色
 d. 味覚 > 嗅覚 : sour smells ; すっぱい匂い
 e. 味覚 > 聴覚 : sweet music ; 甘い音楽
 f. 次元 > 視覚 : flat color ; 平板な色
 g. 次元 > 聴覚 : deep sounds ; 深い音

⁷⁶ 辻 (2002 : 53) を参照。

⁷⁷ 同上。

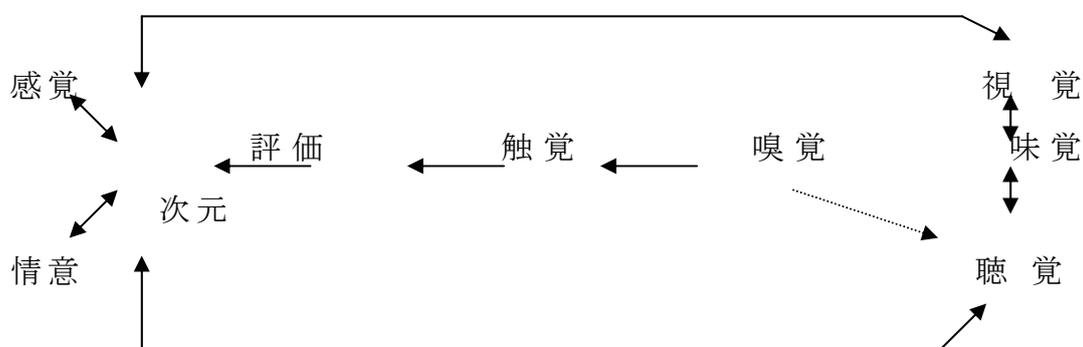
h. 視覚 > 聴覚 : bright colors ; 明るい音

i. 聴覚 > 視覚 : quiet colors ; 静かな色

安井（1978 : 135-136）も Williams（1976）の分析を引き継いで、識別可能の難易さにより、低次元の知覚形容詞から高次元の知覚形容詞へと転用していくという共感覚の**方向性**（directionality）を指摘した。しかし、国広（1989）は聴覚形容詞から次元形容詞へと次元形容詞から聴覚形容詞への**双方向性**（bidirectionality）の転用実例を観察し、日本語形容詞の共感覚現象はより客観的な知覚形容詞からより主観的な知覚形容詞へ（すなわち、(14)の図示の最右端の視覚・次元・聴覚形容詞から最左端の触覚形容詞へ）と転用するという、Williams（1976）とは正反対な方向性に関する結論を下した。

本稿は共感覚に関する用例の实地観察に基づき、基本的には国広（1989）の立場を支持するが、一般化の範囲を客観的な知覚形容詞から中間的な評価形容詞や主観的な感情形容詞⁷⁸に拡大して次のように図示する。すなわち、日本語形容詞の共感覚に関する転用は、知覚形容詞の内部でより客観的な知覚形容詞からより主観的な知覚形容詞へ向かって移行するだけでなく、知覚形容詞の外部でも客観形容詞から中間形容詞へ、そしてまれにはあるが、中間形容詞と主観形容詞との間でも中間から主観へ、および、主観から中間へ、の双方向性が見られるのである。

(16)



⁷⁸ 共感覚による関係形容詞からの転用実例はあまり見受けないが、「遠い異国の地」から「遠い親戚より近い隣り」を経て「あの人は私の遠い親戚に当る」の転用実例に見られるように、具象的な物理世界の实在から抽象的な心理状態の概念へ **隠喩**（metaphor）によるの語義転換が行われている。

- (17) a. 視覚＞評価：日が明るい中に > 明るい性格／人間
- b. 視覚＞評価：顔が真っ赤だ > 真っ赤な嘘
- c. 次元＞聴覚：高い・低いビルディング > 高い／低い声
- d. 次元＞聴覚＞評価：大きい／な／小さい／な子供 > 大きい／な／小さい／な音 > 人間が小さい／大きい
- e. 次元＞聴覚＞評価：太い／細い木の幹 > 太い／細い声 > 太い奴
- f. 次元（＞聴覚）＞評価：高い値段／高い身分／高い地位
- g. 味覚＞評価：甘い饅頭 > 甘い仲／点数；まず(不味)い料理／まずい英語／仕事
- h. 味覚＞評価：うまいラーメン > うまい演技
- i. 味覚＞評価：辛いカレー > 辛い点数
- j. 嗅覚＞評価：くさい匂い > (うさん)くさい人間
- k. 触覚＞評価：柔らかい手 > 柔らかい言葉／口先
- l. 触覚＞評価：堅いパン > 堅い人間／友情／約束・身持ちが堅い
- m. 体覚＞評価：熱いストーブ > 熱い友情
- n. 体覚＞評価＞感覚：冷たいビール > 冷たい人間 > 私は手足が冷たい
- o. 評価＞情意：面白い人間 > 俺はそいつが面白くない
- p. 感覚＞情意：胃が苦しい > 君の親切が心苦しい・頭が痛い > 親の小言が耳痛い・背中が痒い > 君の態度が歯痒い⁷⁹
- q. 感覚＞評価：頭が痛い > 出費が痛い・体がきつい > 言葉がきつい
- r. 情意＞評価：独り住まいが淋しい > 懐が淋しい(=金がない)

⁷⁹「心苦しい・耳痛い・歯痒い」などの複合形容詞は、もともと感覚形容詞の内項である身体的部位を表す名詞「心・耳・歯」が感覚形容詞に **合併／編入** (incorporate) されてできたものであるが、これらの複合形容詞が情意形容詞として使われることに注意されたい。

以上の観察が事実であるとするれば、日本語形容詞における共感覚は一定の方向性をもつことになり、その方向性は本稿における客観形容詞・中間形容詞・主観形容詞の下位分類に符合するばかりでなく、客観形容詞内部の知覚形容詞の下位再分類の区別にも概略符合するわけである。

4.8 下位分類と項構造・主題役割との関係

文の述語として使われる形容詞は、動詞と同じように**項構造** (argument structure) をもつ。項構造とは、述語形容詞が取る**必須項** (obligatory argument) の数とその**意味役割**⁸⁰ (semantic role) を示したもので、 $x \cdot y \cdot z$ などの**変項** (variable) で項を表すこともあれば、**対象** (theme ;Th)・**経験者** (experiencer ; Ex) や**動作主** (agent ;Ag) などの意味役割で項を表すこともある。形容詞は**状態性述語** (stative predicate) に属するので、**動作主述語** (actional predicate) に属する動詞に比べると項構造が簡単であり、項の数は最高2つ(すなわち、**1項述語** (one-place predicate) か**2項述語** (two-place predicate) に属する) で、それが取る必須項の意味役割もおもに対象か経験者に限られる⁸¹。以下、形容詞の下位分類に基づいて、各々の形容詞が取る項構造を意味役割で表す。

(18)

<a.>客観形容詞

(i) 知覚形容詞 : [Th]

(ii) 関係形容詞 : [Th , So / Go / Co]

<b.>中間形容詞

(iii) 評価形容詞 : [Th (Go / Ra)]

<c.>主観形容詞

⁸⁰ 「意味役割」は、「**主題役割**」(thematic role) や「**セータ役割**」(θ-role)ともいう。

⁸¹ 必須項に属する対象と経験者が**構造型** (structural case) の「ガ」格を取るのに対して、疑似項の**起点** (source; So)・**着点** (goal; Go)・**共同者** (commitant; Co)・**範囲** (range; Ra)などは、それぞれ、**意味格** (semantic case) や**後置詞** (postposition) の「カラ」・「ニ」・「ト」・「ニ」を取る。

(iv) 感覚形容詞 : [Ex, Lo]

<+I>⁸² <+body-part>

(v) 情意形容詞 : [Ex, Th]

<+I> <+cause>

知覚形容詞は、その知覚の内容を問わず、すべて 1 項述語に属する。これらの形容詞は、ヒト名詞やモノ名詞を表す対象を**内項** (internal argument) に取り、これが写像されて文の主語となる。「ハ」格が使われたときは、談話の**主題** (topic) を含む有題文／提示文⁸³ になり、「ガ」格が使われるときは、現象の存在や発生を述べる無題文／排他文⁸⁴ になる。

(19) a. ジョンの目 (対象・内項) は／が青い。(視覚形容詞)b. この部屋の天井 (対象・内項) は／が高い。(次元形容詞)c. 花子の声 (対象・内項) は／が低い。(聴覚形容詞)

例文 (19) のように、主語名詞句が所有者・全体名詞「ジョン・この部屋・花子」と所有物・部分名詞「目・天井・声」の関係⁸⁵ にあるとき、所有者名詞だけが主語名詞句から離れて **文** (IP) や**主題句** (TopP) に**付加** (adjoin to) して主題 (「ハ」格を取る) になったり、**大主語** (major subject; 「ガ」格を取る) になったりして「**(多重)主題文**」((multi-)topic sentence) や「**(多重)主格文**」((multi-)subject sentence) を生成する。多重主題文の場合に 1 番目の主題が主題や**話題** (topic) を表し、2 番目以下の主題が**対比** (contrast) を表すのに対し、多重主語構文の場合ほどの主語も「ほかでもないこの人(あるいは、これ)が…」という排他と焦点の意味を表す。

(20) a. ジョン (所有者) は／が目 (所有物) は／が青い。

⁸² <+I> は経験者外項が **第 1 人称** (first person) の **話し手** (speaker) でなければならないことを示す。

⁸³ 「有題文」や「提示文」は、「主題文」・「題述文」や「属性叙述文」などともいう。

⁸⁴ 「無題文」や「排他(特立)文」は、「現象文」・「存現文」・「焦点文」・「総記文」や「事態叙述文」などともいう。

⁸⁵ このような全体・部分の関係を **包摂関係**／**パートニミー** (partonymy) という。パートニミーは **換喩**／**メトニミー** (metonymy) の 1 種で、**隣接関係**／**メロニミー** (meronymy) と呼ばれることがある。

b. この部屋（全体）は／が天井（部分）は／が高い。

c. 花子（所有者）は／が声（所有物）は／が高い。

一方、関係形容詞は、知覚形容詞と異なり、対象を内項に取る以外に、起点（「カラ」と共起）・着点（「ニ」と共起）・共同者（「ト」と共起）を **疑似項**(pseudo-argument；すなわち、「ガ」格を取らない項）に取る。対象内項は文の主語になり、疑似項はその補(足)語になる。

(21) a. 私の家（対象・内項）は／が駅（起点・疑似項）から遠い。

b. 私の家（対象・内項）は／が駅（着点・疑似項）に近い。

c. 太郎（対象・内項）は／が次郎（共同者・疑似項）ととても親しい。

また、評価形容詞は、原則的に対象を内項に取る1項述語であるが、中には**着点や範囲**(Range；Ra)を**随意項**⁸⁶ (optional argument)や疑似項に取るものがある。このとき、随意項は文に付加されて「ガ」格を取ることがある。

(22) a. あの人（対象・内項）は優しい／美しい／すばしこい／素晴らしい。

b. それ（対象・内項）は珍しい／面白い／つまらない／素晴らしい。

c. 先生（対象・内項）は奥さん（着点・随意項）に優しい／甘い。

d. 太郎（対象・内項）は英語（範囲・随意項）に／が強い／弱い。

最後に、感覚形容詞と情意形容詞は、その他の形容詞とは異なり、対象を内項に、そして、経験者を外項に取る2項述語に属する。しかも、経験者外項は**第1人称** (first person) の**話し手** (speaker) で

⁸⁶ 随意項は必須項と違い、文に不可欠な項ではないので、(18 iii) の項構造の中では円括弧の中に入れてある。また、随意項は「ガ」格以外の意味格を取ることができるので疑似項ともいえる。しかし、「あの先生は点数が厳しい／甘い／辛い」の（あの先生の）「点数」は元来対象内項の一部なので所有者が分離して主題や主語になった後でも、「ガ」格を取れる。

なければならない。この結果、対象内項も経験者外項も「ガ」格を伴って文の中に現れる。感覚形容詞と情意形容詞の異なるところは、前者が経験者主体の生理的な感覚を表し、その対象内項が経験者外項の**身体部位** (body-part) であり、経験者と対象との関係が**再帰的** (reflexive) でなければならないのに対し、後者は経験者主体の心理的な情意を表し、その対象内項が経験者外項とは独立した対象や**誘因** (cause) を表し、**非再帰的** (irreflexive) であるという点である。

(23) a. 私／*君／*太郎 (経験者・第1人称話し手・内項) は 頭 (身体部位・内項) が痛い。 (感覚形容詞)

b. 私／*君／*太郎 (経験者・第1人称話し手・外項) は 故郷 (対象／誘因・内項) が懐かしい。 (情意形容詞)

第1人称話し手の経験者は、**空の代名詞** (pro) で現れることもできるので、文の中で顕在化する必要はない。しかし、第1人称話し手が顕在化しなくても、身体部位の持主はやはり第1人称話し手である。

(24) a. (私は／pro) 頭 (身体部位) が痛い。

b. (私は／pro) 故郷 (対象／誘因) が懐かしい。

また、感覚形容詞文や情意形容詞文が例文(20)の多重主題文や多重主格文と違うのは、(i)項構造の中には対象である内項のほかに経験者が外項として含まれていること、(ii)その外項は第1人称話し手でなければならない、(iii)内項はそれぞれ身体部位や対象／誘因を表す名詞句でなければならない⁸⁷ことである。しかし、感覚形容詞に関するこのような項構造と主題役割の分析には、1つの問題が起こる。それは、情意形容詞が経験者外項と誘因内項の2つの項しかならないのに対し、感覚形容詞は経験者外項と身体部位内項の他にさらに誘因を取ることがあるからである⁸⁸。

⁸⁷ 感覚形容詞の経験者外項が第1人称話し手でなければならない、対象内項がその身体部位でなければならないということは、後者が前者と**同一指示** (co-indexed) で、かつ、前者によって**C統御** (c-command) されることによって**束縛** (bound) されなければならないことを示している。

⁸⁸ 以下の例文と説明は 矢沢 (1998:53-54) の論述を参考にした。また、矢沢 (1989:54) は誘因「デ」格や「ガ」格と共起する「痛い」は「靴に入った小石

- (25) a. 私（経験者・外項）は／が 足（身体部位・内項）が痛い。
 b. 私（経験者・外項）は／が 靴に入った小石（誘因・内項）が痛い。
 c. 私（経験者・外項）は／が 靴に入った小石（誘因・随意項）で 足（身体部位・内項）が痛い。
 d. 私（経験者・外項）は／が 靴に入った小石（誘因・内項）が 足（場所・随意項）に痛い。

すなわち、感覚形容詞「痛い」は、(25a) や (25c) のように身体部位を内項に取り、(25c) のように誘因を随意項に取ることもできる一方、(25b) や (25d) のように誘因を内項に取り、(25d) のように身体部位を随意項に取ることもできる。同じように、感覚形容詞「まぶしい」も身体部位「目」を内項に取り、かつ、誘因「太陽の光」を随意項に取ることもできれば、誘因「太陽の光」を内項に取り、かつ、身体部位「目」を随意項に取ることもできる。

- (26) a. 私（経験者・外項）は／が 目（身体部位・内項）がまぶしい。
 b. 私（経験者・外項）は／が 太陽の光（誘因・随意項）で 目（身体部位・内項）がまぶしい。
 c. 私（経験者・外項）は／が 太陽の光（誘因・内項）がまぶしい。
 d. 私（経験者・外項）は／が 太陽の光（誘因・内項）が 目（身体部位・随意項）にまぶしい。

それゆえ、(18) の感覚形容詞 (iv) と情意形容詞 (v) に関する項構造と主題役割は、次のように書き直す必要がある。

- (27) a. (iv) 感覚形容詞：[Ex , (Lo ∩ Ca)]

<+I> <+body-part>

- b. (v) 情意形容詞：[Ex , Th]

で／が痛い足」のように場所格「足」を連体修飾できるが、場所「ニ」格と共起する「痛い」は「足に痛い靴に入った小石」のように誘因格「小石」を連体修飾できるのに対し、誘因「ガ」格と共起する「痛い」は「[?]足が痛い靴に入った小石」のように誘因格「小石」を連体修飾できないことを指摘している。

<+I> <+cause>

交差した円括弧 (linked parenthesis) 「(…∅…)」は、2つの円括弧の中の少なくとも1つの項が文構造に顕在化されねばならないことと示し、項が2つとも選ばれた場合にはその左右行列の順序は自由であることを示す。すなわち、(27)の(iv)に属する感覚形容詞の項構造 [Ex, (Lo ∅ Ca)] では、[Ex, Lo]・[Ex, Ca]・[Ex, Lo, Ca] と [Ex, Ca, Lo] の都合4つの配列組み合わせが可能なのである。しかし、ほとんどの感覚形容詞は [Ex, Lo] の項構造をもち、わずかに「痛い・まぶしい」などのごく少数が [Ex, (Ca ∅ Lo)] の項構造をもつ。これに引き換え、(27)(v)に属する情意形容詞の項構造では、ただ1つ [Ex, Th] の項構造が許されるだけである。

さらに、情意形容詞は内項として対象や誘因を表す**命題** (Pr(osition); すなわち、節) を取ることができるが、感覚形容詞は内項として身体部位や場所を取るのも、命題や節の形を取ることはできない。

(28) a. (私は) [君が傍にいてくれるの⁸⁹] が嬉しい。

b. (私は) [皆さんがこうして関心をもってくれるの] が有難い。

また、情意形容詞と感覚形容詞は理由や原因を表す従属節を項ではなく、付加詞として取ることができる。

(29) a. (私は) [君が傍にいてくれるの] で嬉しい。

b. (私は) [一晩中寝ていないの] で頭が痛い。

(28) と (29) の比較から、後者の付加詞が「デ」格を取って理由や原因を表すのに対し、前者の内項は「ガ」格を取って誘因よりも対象に近い意味役割を担っているのではないかと思われる。

このほか、(29a) は (30a) のように置き換えることができるが、(29b) から (30b) への置き換えは少なからず不自然に感じられる。

⁸⁹ 命題や節の末端に現れる「の」は、節を名詞化する **形式名詞** (formal noun) か **補文化辞／標識** (complementizer) と分析することができる。

(30) a. (私は) [君が傍にいてくれて] 嬉しい。

b. ??(私は) [一晩中寝ていなくて] 頭が痛い。

このことは、(30a) が原因を表す (29a) からの置き換えではなく、対象を表す (28a) からの置き換えであることを示唆し、かつ、情意形容詞の対象内項が**限定節** (finite clause) から**不定節** (nonfinite clause; すなわち、「テ」形) に切り換えができることを物語っている。

4.9 下位分類と「第1人称話し手の制限」との関係

客観形容詞と中間形容詞が対象を内項とする1項述語に属するのに対し、主観形容詞は経験者を外項とし、誘因を内項とする2項述語 (すなわち、情意形容詞) か、それとも場所か誘因の1つを内項とし、もう1つを随意項とする疑似3項述語 (すなわち、感覚形容詞) かに属する。しかも、経験者外項は必ず第1人称話し手でなくてはならない。このような制限を「**第1人称話し手の制限**」 (First-Person Speaker Constraint) と呼ぶ。

第1人称話し手の制限は、主観形容詞に属する感情形容詞の経験者主語や主題だけに課される制限であるが、その適用に当たっては次のことに注意しなければならない。

(i) 述語形容詞は未然形／非過去形に限られ、已然形／過去形には適用しない。

(31) a. 私／*君／*太郎は (今) 頭が痛い。

b. 私／君／太郎は (あのとき) 頭が痛かった。

(32) a. 私／*君／*太郎は故郷が懐かしい。

b. 私／君／太郎は故郷が懐かしかった。

(ii) 述語形容詞は**裸の形容詞**⁹⁰ (bare adjective) であり、「～だろう・～そうだ・～はずだ・～らしい・～かもしれない・～と思う」などのモダリティ表現と共起しないときに限って適用される。

⁹⁰ ここでいう「裸の形容詞」とは、モダリティ表現の補助動詞や準体助動詞などがつかない形容詞を指し、程度副詞の修飾を受けないという意味ではない。

(33) a. *私／君／太郎はそぞかし頭が痛い だろう／と思う。

b. *私／君／太郎は故郷が懐かしい はずだ／かもしれない。

(iii) 述語形容詞は直接話法の主文に現れたときに限られ、理由や・原因を表す従属節・間接話法や疑問文に現れたときには適用しない。

(34) a. 私／*君⁹¹／太郎は頭が痛いので 寝ていた。(理由従属節)

b. 私／君⁹²／太郎は頭が痛いから 行けないだろう。

(原因従属節)

c. 私／君／太郎は頭が痛いと言っている。(間接話法)

d. 君／太郎は頭が痛いの？ (yes-no 疑問文)

e. 誰が 頭が痛い の？ (wh 疑問文)

(iv) 述語形容詞の語幹に形容名詞化接尾辞の「-そう」「-げ」や動詞化接尾辞の「-がる」「-む」などがつくと、この制限は適用しない。逆に、一般の動詞でも願望を表す形容詞化接尾辞「-たい」を取って情意形容詞に似た働きをもつと、この制限が適用する。

(35) a. 君／太郎はなんだか悲しそうだね。

b. 君／太郎はなんとなく悲しげに見える。

c. 君／太郎が悲しがる理由はないよ。

d. 太郎はさかんに悲しんでいるよ。

(36) a. 僕／君／太郎も酒を飲む。

b. 僕／*君／*太郎も酒が飲みたい。

過去形・モダリティ表現・(理由従属節や間接話法の) 接続詞・(形容名詞化や動詞化の) 接尾辞に共通するものは、みな述語形容詞の後ろになにかを付加するということである。そこで以上の4点をまとめてさらに一般化するとすれば、それは述語形容詞は裸の形容詞、

⁹¹ ここで「君」が使えないのは、「～ので」理由従属節で伝達される情報は原則的に「話し手指向」(speaker-oriented; すなわち、理由の内容は話し手が誰よりもよく知っている)なので、聞き手「君」に関する情報になると矛盾が生じるからであろう。

⁹² ここで「君」が使えるのは、「～から」原因従属節で伝達される情報は「話し手指向」ではなく、「聞き手指向」であることによると思われる。

あるいは**言い切りの現在形**⁹³ (irrealis finite form) で終わらなければならないということである。このことは、言い換えると、いわゆる「言い切りの現在形」が**直接話法** (direct narration) の**陳述文／平叙文** (indicative sentence) という**ムード／法** (mood) を表していることを物語っている。すなわち、寺村 (1982) が言っているように、感情形容詞における第 1 人称話し手制限の問題は、これら形容詞が表している事態に関係しているだけではなく、この事態を包んでまとめ上げた文のムードに関する問題でもある⁹⁴。

4.10 下位分類と程度副詞との関係

最後に、日本語形容詞の下位分類と程度副詞の間における共起制限について述べよう。程度副詞は属性や状態を表す語に付属してこれを限定するもので、「すごく・とても・たいへん」など主観性や「わがこと性」をもつものと、「ずいぶん・わりあい・いっそう・いちだんと・すこぶる・はるかに・やや」など客観性や「ひとつと性」⁹⁵をもつものに大別することができる。渡辺 (1991) や沢田 (2000) が指摘するように、属性や関係を表す客観形容詞と程度副詞の間には特定の共起制限はないが、感覚や情意を表す主観形容詞は主観性や「わがこと性」を表す程度副詞とは共起できるが、客観性や「ひとつと性」を表す程度副詞とは共起できない。

(37) a. この部屋はすごく／とても／たいへん／すこぶる／ずいぶん／わりあい／いっそう／いちだんと／はるかに／やや広いね。
(属性・知覚形容詞)

b. 家から駅まではすごく／とても／たいへん／すこぶる／

⁹³ 伝統的な国語学ではこの形を「終止形」と呼ぶことがある。

⁹⁴ 野田 (1989) は **モダリティ** (modarity) を“話し手の発話時における心的態度の直接的な表明”と定義し、感情表出のモダリティは「発話時」「話し手の心的態度」「直接的な表明」の 3 つの条件を同時に満たしたときにはじめて「真性モダリティ」をもち、その 1 つでも欠けていれば「虚性モダリティ」をもつと言う。

⁹⁵ 渡辺 (1991) を参照。

ずいぶん / わりあい / いっそう / いちだんと / はるかに /
やや 遠いね。(関係形容詞)

(38) a. 私は頭がすごく / とても / たいへん / すこぶる / *ずい
ぶん / *わりあい / *いっそう / *いちだんと / *はるかに /
 *やや 痛い。(感覚形容詞)

b. 私は故郷がすごく / とても / たいへん / すこぶる / *ずい
ぶん / *わりあい / *いっそう / *いちだんと / *はるかに /
 *やや 懐かしい。(情意形容詞)

では、客観形容詞と主観形容詞の中間に位置する評価形容詞と程度副詞の共起関係はどうであろうか？この場合、中間形容詞である評価形容詞は客観形容詞に歩みを寄せるように思われるが、母語話者の中には「ひとごと性」の程度副詞との共起を少し不自然だと判定する人もいる。

(39) a. あの人はすごく / とても / たいへん / すこぶる / ずい
ぶん / わりあい / いっそう / いちだんと / はるかに / やや
 頭がいい。

b. 次郎は英語にすごく / とても / たいへん / すこぶる /
 (?)ずいぶん / (?)わりあい / (?)いっそう / (?)いちだんと /
 (?)はるかに / (?)やや 強い。

また、述語が客観形容詞の場合、「-らしい / だろう」などの主観的な推量を表すモダリティ表現が付いても、「ひとごと性」程度副詞の適格性は落ちないが、述語が主観形容詞でも「-そう / げ」などの客観的な様相を表す接辞が付くと、「第1人称話し手の制限」が除かれる上に、「ひとごと性」の程度副詞も容認される。

(40) a. その部屋はすごく / とても / たいへん / すこぶる / ずい
ぶん / わりあい / いっそう / いちだんと / はるかに / やや
 広い らしい / だろう ね。

b. 彼はすごく / とても / たいへん / すこぶる / ずいぶん /
わりあい / いっそう / いちだんと / はるかに / やや 嬉し
そう / げ だね。

5. むすび

以上、理論分析の視点から、日本語形容詞の下位分類についてその分類基準と分類機能を述べた。その結果、日本語形容詞の下位分類が単なる概念的・抽象的なものではなく、かなり明確な分類基準のもとで下位分類することができる上に、その下位分類は形態的・統語的・意味的にさまざまな相関性があることがわかっていただけだと思う。日本語形容詞の下位分類は単なる理論的・人為的な所産ではなく、広汎な言語事実の支持を受け、確固たる**心理的実在性** (psychological reality) をもつものなのである。

これらの下位分類は理論分析的に意義があるだけでなく、日本語教育の現場においてもその価値が見出されることと思われる。例えば、「痛い」「痛々しい」「痛ましい」の3つの形容詞の意味と用法は現場の授業でいかに説明されるべきであろうか。まず、「痛い」は主観形容詞の感覚形容詞に属する形容詞で、[Ex, (Lo) Ca] の項構造をもつので、上述 (25) や (26) のような例文に現れることができる。また、感覚形容詞は「第1人称話し手の制限」を受け、経験者外項と場所内項の間に再帰性が存在するので、経験者主語は第1人称話し手の「私・僕」など（空の第1人称代名詞「pro」を含む）でなければならない、場所補(足)語はその身体部位でなければならない。「痛い」が経験者外項と場所内項を取る2項述語として使われた場合、外項も内項も「ガ」格を取るが、加えて原因をも取る3項述語として使われた場合には、場所が「ガ」格を取れば、原因は「デ」格を取り、逆に原因が「ガ」格を取れば、場所は「ニ」格を取るといような格表示の交替が見られる⁹⁶。

次に、「痛々しい」は形容詞語幹の「痛」が反復し、それに接尾辞の「-しい」が付いているところから、「はたから見て心が痛むほど、大層かわいそうである」という意味を表す評価形容詞であると判定

⁹⁶ すなわち、外項と内項が同時に「ガ」格を取ることは許されるが、内項同士が互いに「ガ」格を取ることはならないという **二重ヲ格の禁** (prohibition against double-accusative) に似た制約が存在するのである。

される。評価形容詞の項構造は、原則的に（あるいは、無標の場合は）[Th] であるので、「彼のやせこけた姿は見るも痛々しい」のように 1 項述語として使われるのが原則である。

最後に、「痛／傷ましい」は「苦痛に思う、なやみに思う、かなしく感ずる」の意味を表す動詞の「痛／傷む」から派生されたものと思われ、「わが身が痛むほどかわいそうである、ふびんである、いたわしい、苦しい、迷惑だ」⁹⁷のような多様な意味に使われるが、本質的には [Ex, Th] の項構造をもつ情意形容詞であると分析することができる。また、形容詞「労(いたわ)しい」にも語幹部分に「いた」が含まれるが、字訓に「痛」や「傷」ではなく、「労」を取り、語義的にも「骨が折れてつらい、苦労である、病気でなやましい、気の毒だ、大切に思う」⁹⁵などの意味に使われるところから、「ほねおる、苦労してつとめる、病む、わずらう」⁹⁵を表す動詞の「労る」から派生されたものと思われる。しかし、「労しい」は現代日本語ではあまり使われないようである。

この他、「危ない」や「危なっかしい」などのペアをなす形容詞も、両者ともに [Th] の項構造をもつ評価形容詞と分析することができ、前者が「危険だ、ふたしかであてにならない」と直截的に判断するのに対し、後者は「危なげである」といくぶん保留のモダリティの意味を持たせて判断している点に相違が見られる。また、これらの形容詞には対応する動詞として「危ながる」があるが、『広辞苑』ではこの動詞を「自(動詞)四(段活用)」と分析し、「あぶなげに思う」と解釈している。

このように、日本語形容詞の下位分類はその下位分類の基準や機能を明確にし、充実させることによって、理論的価値ばかりではなく、現場の日本語教育にも大いに寄与する余地があると思われる。

(本稿の完成に当たっては、院生でありかつ研究助手でもある劉懿珍君の協力に預かるところが大きかったことに謝意を述べたい。)

⁹⁷ これらの語義解釈は『広辞苑』を参考にした。

参考文献

- 朝日新聞社（編）（1989）『『おくのほそ道』を行く』朝日新聞社。
- 東弘子（1992）「感情形容詞述語文における感情主の人称制限—叙述の立場から」『日本語論究 3 現代日本語の研究』45—68 和泉書店。
- 荒正子（1989）「形容詞の意味的タイプ」『ことばの科学』3：147—162 むぎ書房。
- 伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』研究社。
- 沖森卓也（1985）「形容詞の成立」『日本語学』4, 3：36—46 明治書院。
- 川端義明（1983）「文の構造と種類—形容詞文—」『編集日本語研究（一）現代編』1—40 明治書院。
- 金水敏（1990）「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学：国文編』41：26—36 大阪女子大学。
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15 日本言語学会
- 草薙裕（1977）「日本語形容詞表現の意味—情報提供という観点からの考察」『文芸・言語研究・言語編』2：89—110。
- 新村出（編）（1955）『広辞苑』岩波書店。
- 小針浩樹（1984）「文類型の中での形容詞文の位置づけについて」『国語学研究』33：53—61 東北大学文学部。
- 佐々木邦（1975）『佐々木邦全集』（全 14 卷）講談社。
- 沢田春美（2000）「チャレンジコーナー・ジュニア版」『言語』29, 5：122—124 大修館書店。
- 辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード辞典』研究者。
- 筒井康隆（1990）『文学部唯野教授』岩波書店。
- 寺村秀夫（1973）「感情表現のシンタクス—『高次の文』による分析の一例」『言語』2, 2：98—106 大修館書店。
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版。
- 湯廷池（2006a）「日本語の動詞と形容詞について」未発表論文。

湯廷池 (2006b) 「「感覺形容詞」と「情意形容詞」の下位分類—分類基準と分類機能」未発表論文。

湯廷池 (2006c) 「形容詞の名詞化接尾辞『-さ』と『-み』について」未発表論文。

湯廷池 (2006d) 「形容詞の形容名詞化接尾辞『-そう』と『-げ』について」未発表論文。

湯廷池・簡嘉菁 (2006) 「華語與日語「雙主句」的對比分析」第八屆世界華語文教學研討會發表論文

時枝誠記 (1950) 『古典解釈のための日本文法』至文堂。

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 44 秀英出版。

仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『言語』27, 3 : 26—35 大修館書店。

野田尚文 (1989) 「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』くろしお出版。

長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』87-93 大修館書店

樋口文彦 (1995) 「形容詞について—状態形容詞と質形容詞」『教育国語』2, 180 : 2—11。

飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

細川英雄 (1989) 「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158 : 14—26 国語学会。

益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版。

矢沢真人 (1998) 「日本語の感情・感覺形容詞」『言語』27, 3 : 50—56 大修館書店。

安井稔 (1978) 『言外の意味』研究社。

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版。

山本和之 (1983) 「日英の感情形容詞 (1)」『他者の心的・感覺的狀態の表出に関する日英語の比較研究』1—61 科学研究費補助金研究報告。

渡辺実 (1991) 「「わがこと」・「ひとごと」の観点と文法論」『国語

学』 165 : 1 – 14。

Ullman, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*.

Basil Blackwell.

Williams, J. M. (1976) "Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Universals," *Language* 52 (2) : 461 – 478.